

塩田城跡

第3次発掘調査概報

1978年3月

上田市教育委員会

序 文

上田市塩田、塩田平南端独鈷山周辺は、古代から近世にわたる文化財の宝庫として多くの人たちの関心をあつめています。この独鈷山の中央に位置する長野県史跡塩田城跡は、塩田平の文化の重要な歴史的役割を負っていたことが、長年の調査によって解明されて参りました。昭和43年度の空堀跡の調査をはじめとし、その後も虎の口の調査を経て、昭和50年度・51年度に国庫補助を得て、本格的な発掘調査をすすめましたが、その成果は第1次・第2次発掘調査概報の示すとおりであります。

本年度は、IV-E段郭の東半分の調査が猛暑のなかで行なわれました。この3年間にわたる調査で、城跡の1つの段郭の全面を明らかにし塩田城跡の性格をつかむことができ、多くの成果をあげることができました。これは、終始ご熱心にご指導をいただいた顧問一志博士をはじめ、調査会・調査団の方々のご尽力、ならびに、地元東前山自治会の皆さまの熱意ある協力のおかげと深く感謝の意を表するものであります。

今後は3年間にわたる調査の結果をふまえ、国の史跡指定に向けて努力をし、塩田城跡の保存と活用を積極的にすすめて歩きたいと考えております。

昭和51年3月

上田市教育長 滝 沢 石

例 言

1 本書は、昭和52年7月20日から同年9月2日まで43日間にわたって実施した長野県上田市大字前山の長野県史跡塩田城跡の第3次発掘調査に関する概要報告書である。

1 本調査にあたっては、国庫ならびに県費の補助の交付をうけ、上田市が実施した。

1 本書はあくまで中間的な概要報告であるから、結論的な記述はつとめて避けた。

また、内容も種々不備な点のあることを了承されたい。これらは、後日の調査が実施されたとき、訂正補充する所存である。

1 執筆は次のとおり担当した。

第一章・五章 ……黒坂周平

第二章第三節・第四章……川上 元

第三章 ……桐原 健

第二章第一・二節 ……事務局

1 写真撮影は発掘に関しては山辺健夫、遺物については川上元が担当した。

1 遺物整理は川上元が担当した。

1 今回の調査にあたっては、地元東前山自治会の方々の強力なご支援をいただいた。心よりお礼を申し上げる。

その他、調査にご協力をいただいた各方面の方々に対して深く謝意を表する。

目 次

序 文	1
例 言	2
第一章 環 境	6
第一節 地理的概況	6
第二節 歴史的概況	8
第二章 調 査	12
第一節 調査の経過	12
第二節 調査会・調査団の構成	14
第三節 発掘調査日誌	16
第三章 遺 構	20
第四章 出土遺物	30
1 土師質土器	30
2 須恵質土器	32
3 陶 器	32
4 磁 器	33
5 金属製品	33
6 石製品	34
7 土製品	35
第五章 小 括	35

圖 版 目 次

圖版 1	遺跡全景.....	1
圖版 2	遺構（暗渠遺構・遺構全景）.....	2
圖版 3	遺構（石列遺構・SX01 石列遺構断面）.....	3
圖版 4	遺構（石組遺構 SX03・石組遺構断面 SX03）.....	4
圖版 5	遺構（石列遺構 SX04・石組遺構 SX07）.....	5
圖版 6	遺物出土状況.....	6
圖版 7	土器質土器.....	7
圖版 8	土師質土器.....	8
圖版 9	土師質土器.....	9
圖版10	須惠質土器・陶器.....	10
圖版11	陶 器.....	11
圖版12	陶 器.....	12
圖版13	磁 器.....	13
圖版14	金屬製品.....	14
圖版15	石製品.....	15
圖版16	土製品.....	16
圖版17	土製品・鉄滓.....	17

挿 図 目 次

第1図	塩田城跡周辺の地形.....	7
第2図	塩田城周辺拡大図.....	9
第3図	塩田城跡役郭概念図.....	10
第4図	発掘風景.....	13
第5図	文化庁伊藤監査官の視察.....	16
第6図	顧問をまじえてのミーティング.....	18
第7図	最終日の記念撮影.....	19
第8図	暗渠造構.....	21
第9図	SX01 断面.....	23
第10図	SX05	24
第11図	SX03 実測図.....	25
第12図	SX07 実測図.....	26
第13図	造構実測図.....	27
第14図	柱穴群.....	29
第15図	土師質土器.....	30
第16図	土師質土器.....	32

第一章 環 境

第一節 地理的概況

塩田城跡は、塩田盆地の南辺を画する独鈷山の北山麓線のほぼ中央部に当り、標高約600mあって、塩田盆地を眼下一望の中におさめる所にある。これを地形的にみれば、これより東方には四つの分離丘陵が前面に並んでいるのに対し、西部は山麓線から直ちに四つの扇状地群の展開しているところで、塩田城跡はこの東西二つの地形面の接点に近い位置にある。

この地方の人々が鎌倉街道と呼んでいる古道は、西方松本方面からこの四つの扇状地群の扇頂部一谷の出口と、四つの分離丘陵とを横切って丸子町方面に向かって東進しているのである。

城跡のある東前山は、この四つの扇状地のうち、神戸川のつくった最も大きい扇状地に位置している。神戸川は独鈷山塊の東方に源を発し、西は弘法山支脈、東は安曾岡山との間を受水区域とし、そこを深く浸食した峡谷を流下している。その扇状地は塔の原の奥から始まり、現河床を中心に遠く北方、産川に達している。上流部では下刻して峡谷状を呈しているが、谷の中流から下流にかけては堆積の方がまさり、川底は浅くなり、末流部では天井川を形成し、そこに押出という地名さえある。

この神戸川扇状地の西に、塩野川扇状地がある。塩野川扇状地は竜王山東斜面と、弘法山西斜面（やぶさめ入）の水を合わせて北流する塩野川が、その合流点附近から大扇状地をつくっているもので、末端は産川に接している。

この神戸川扇状地と、塩野川扇状地の間の山地に接するところに、なお二つの小扇状地がある。東が御前沢扇状地、西が竜光院扇状地である。塩田城跡のあるのは、主として御前沢扇状地で、その段郭の一部は、西にのびて竜光院扇状地に及んでいる。

城跡のある東前山集落を子細に点検すると、その主要集落は、神戸川扇状地の扇尖部・弘法山山麓からはじまるが、神戸川に添わず、わずかに西方によっていること、各屋敷が1m内外の石垣によって区画され、それが南北のほぼ直線的な幹線道路（一立町）を軸として肋骨形の地割をもつこと、立町の北端が東の柳沢集落からくる古道と直交し、このあたりが上の集落地帯と、下の水田地帯の境目となっていること等、計画的に行われた人為的集落で、自然発生的な農村集落でないことを物語っている。

神戸川扇状地の南山麓部に、塩田城跡が位置する。ここを「御前」といい、このあたりに道路が直線状にほぼ南北、東西に走り、石垣によって平坦化された地割の跡がみられ、各所に井戸があって、明らかに往古の屋敷跡とみられる。その最南端に三島神社があり、その下に澁水を伴う井戸がある。

今度発掘した地点は、この井戸の下の方の平地（第3図IV-E段郭）で、「御前」の扇状地を10数段に



第1図 塩田城跡周辺の地形

削平したもののうち最も大きいものの1つで、前記湧水を伴う井戸のほか、神戸川から引水したと思われる形跡が残っている。この地点は急峻な山地の出口にありながら、自然的浸食や大きな押出を受けていない点に特徴があるが、それは人工的な排水路を東西両側につくっていたからであると思量される。(以上付図参照)

第二節 歴史的概況

塩田平を中心とする数キロ平方の土地は、“信州の鎌倉”ともいわれるように、鎌倉期から室町期にわたる文化財が密集していて、その点地方では珍しいところといわれている。その原因は、鎌倉中期に幕府の重臣北条義政がこの塩田城に居を構えたことに深い関係がある。

義政は、北条時宗が執権のとき連署までしていた人であるが、彼が建治3年(1277)信州の塩田へ入ったのは、その時の塩田が歴史的にきわめて重要な位置を占めていた地点であったからに他ならない。古代、信濃国造は塩田(おそらくは生島足島神社附近)にいたということは定説となりつつあるし、信濃国府も8世紀末までまた塩田平を含む現上田市一帯の地にあったということは動かない。その故にか、平安末、木曾義仲が信濃で挙兵するに際しては、とくに塩田平の東辺に近い依田城を拠点とし、東信濃・西上州の兵を率いて、一挙に京に馳せのぼったのであった。

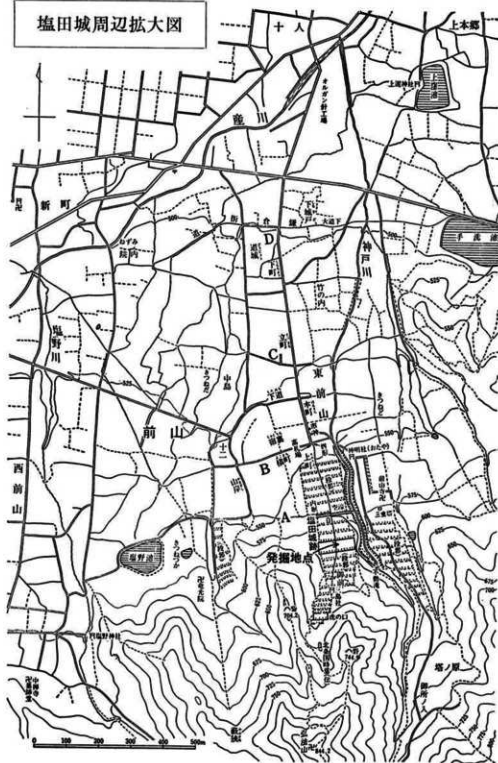
鎌倉幕府創設に当って頼朝は、とくにこの信濃における塩田平の重要性を顧慮し、まず縁戚である比企能員を信濃の守護人とするとともに、腹心の惟宗忠久(島津忠久)を塩田の庄の地頭に任命した。

頼朝が逝去し、比企氏が滅亡してから、信濃は次の幕府の権力者北条氏の直轄するところとなり、執権義時の手からその子重時に伝えられ、この重時およびその子孫が、代々信濃の守護としてその職をうけついでいったことは諸史料の明示するところである。

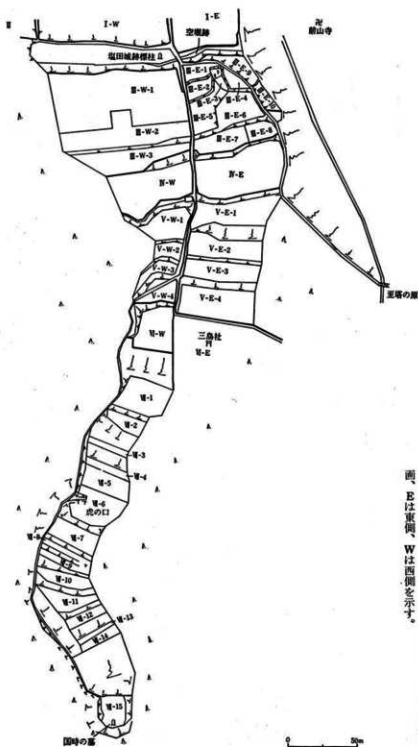
義政はこの重時の第三子に当る。彼が幼少のころすでに塩田は「信州の学海」であったことを物語る史料があり、また鎌倉に創立された禅宗の名刹建長寺と深い関係をもつ安楽寺が塩田の地に開かれたのは彼の青年のころに当る。

信濃守護の宗家に生れた彼は、その正嫡である義宗(重時の孫)が幼少であった理由から、幕閣にあったところからこれを補佐して信濃守護の役も行っていたと考えられ、また塩田に入ってから三か月もたたぬうちに、この義宗が逝去するので、その子の幼少な久時(当時九才)にかわって、現地で信濃の政務を執り行ったであろうことも当然想像せられる。いってみれば守護代行の役を引き受けたのである。この想定がなければ、久時がこれから後信濃守護職を帯びながら、たとえば22歳の若冠で六波羅北方となり、後評定衆・寄合衆・官途奉行など急速な昇進をつづけることができなかったはずであり、また義政を祖とする塩田北条氏が三代ここにおいて、幕府滅亡に際し、一族を率いて鎌倉に出陣全滅するまで忠誠を尽すというような事実もあり得なかったであろう。

塩田城周辺拡大図



第2図 塩田城周辺拡大図



(註) I・II・III……の数字は大区画、1・2・3……の数字は小区画、Eは東側、Wは西側を示す。

第3図 塩田城跡段郭概念図

この義政が居したところが東前山にある塩田城といわれている。居館跡と想定せられる地点以北、産川に至る扇状地上には、整然と削平地や地割りのあとが残り、すでに一志茂樹博士等の調査では、これらの遺構はその形式からみて中世もかなり遡るものと想定されている。また居館跡と想定せられる一帯の最高部、山麓に接するところに三嶋明神が祭られている。三嶋明神はもと伊豆の白浜に鎮座し、後東海道の三島（現三島市）に祀られた大社で、鎌倉期を通じて北条氏のとくに尊崇した社であることは注目すべきである。

但し、この館址は、北条氏の滅亡後、東信濃の有力な土豪村上氏（本郷地科郡郷町）の前線基地となり、約200年その直臣福沢氏が居館し、さらに戦国末武田信玄の侵攻にあって落城した。

したがって、この地は鎌倉時代から室町、戦国時代にかけて、多くの勢力の本拠とした複合城跡と考えなければならない。

今回発掘したのは、この城跡のうち政庁跡と想定されるところの一部であって、削平地としては最も広いものの一つの一区域の東側（第3図IV-E段部）である。

第二章 調 査

第一節 調査の経過

上田市大字 前山字上町の塩田城跡は、鎌倉時代の信濃守護所跡についで戦国時代村上氏代官の福沢氏居城ともいわれ、中世から近世に至る歴史の鍵を握る遺跡として多くの関心を集めてきた。

ところで塩田地区は、多くの歴史的文化的遺産に恵まれ、地域的な研究活動が盛んであるが、塩田城跡についても信濃史学会々長一志茂樹博士、同理事黒坂周平氏などが精力的研究を進め、地元でも黒坂勝氏などがこれに呼応し、塩田城跡保存会をつくるなどして熱心な活動を行っていた。

塩田町当時の昭和43年、44年と二年続けて発掘調査が行われ、得られた成果はこの歴史的解明への大きな足がかりとして、関係者に多くの期待を抱かせたものである。

昭和43年8月、黒坂勝氏を団長として現在内堀跡と呼ばれる地塊 10m²を発掘し、地表下2mで10cm内外の厚さをもって、粘土で固められた堀の基底部を発見、W字形180mの長さである旨報告されている。

翌昭和44年8月には、同氏を団長に内堀跡南方約300mの虎の口地籍(3図IVの6) 100m²の発掘を行い、土砂で埋もれていた東西に走る石積や、地下260cmで粘土の混入した木炭層などが確認されたという。

翌45年4月1日、上田市と合併したが、この9月、上田市教育委員会が主体となり、米山一政氏を団長に、第三次の発掘調査が行われた。調査は前回に引き続いて虎の口地籍を中心に実施し、東南隅から北へ向かう石積み、井戸址などが発見された。

この間、昭和45年4月13日、通称樹形地籍から南方にむかい約14万6千平方メートルという広大な面積が長野県史跡の指定を受けたことは、この調査によって得られた資料とあわせて、塩田城跡の名を一段と世に広めた。

ところが、この頃から、農業政策の転換により、上田・小県地方では朝鮮人参の栽培が活発化し、東前山でもこれに着手する農家が増えてきた。

塩田城の遺跡内にも、この適地としてフルトナーがはいり、深く耕す作業風景が見られるようになったことから、埋蔵遺跡、遺物の破壊、壊滅を危惧する声が目増しに高くなった。

そしてこの声は、発掘調査による学術的な解明実現と、保存の急務を訴える世論へと動いていったのである。その後、昭和49年10月から翌50年にわたって長野県文化財保護協会による塩田城跡総合調査が実施された。

上田市教育委員会では、以前から緊急発掘調査を国庫補助事業として実施すべきであると各

方面へ働きかけてきたが、昭和50年度において初めて事業実施が決定し、塩田城跡第1次発掘



第4図 発掘風景

調査を総額250万円で行った。

この調査は昭和50年7月20日から同年8月12日までの間行われ、発掘箇所は、塩田城跡空堀南方IV-W段郭、上田市大字前山字上町310ノ1・2で、面積は720m²に及んだ。

その結果、5間×5間の建物跡や溝道構をはじめ、遺物でも木製品、陶磁器など多くの成果をおさめることができた。(第1次発掘

調査概報参照)

第2次発掘調査は、51年7月20日から同年8月12日まで総額500万円で行った。

この調査は、第1次調査にひきつづきIV-W段郭と、その東、IV-E段郭の西半分を対象とした。その結果、IV-E段郭では3列の礎石群とそれを囲む溝状遺構、および、礎石群を検出することができ、出土遺物も土器・石製品など多くの成果を得ることができた。(第2次発掘調査概報参照)

昭和52年度は、調査会を7月4日に発足し、調査方針の大筋を確認した。

その概要は、①IV-E段郭面の東半分を調査し、その段郭の構造・性格をつかむ。②塩田城跡を中心として周囲75haの1000分の1の地図を作成する。③調査費は総額800万円とするなどであった。

この決定に基づき、7月19日東前山公会堂において調査団結成式をもち、あくる7月20日から第3次の塩田城跡発掘調査を開始した。

第二節 調査会・調査団の構成

塩田城跡発掘調査会名簿

顧問	一志茂樹	長野県文化財保護審議会長
"	宝月圭吾	東京大学名誉教授
"	石井進	東京大学文学部助教授
会長	石井泉	上田市市長
理事	河原純之	朝倉遺跡研究所長
"	太田波夫	長野県教育委員会文化課長
"	原嘉藤	信濃史学会常任理事
"	大沢和夫	長野県考古学会長
"	黒坂周平	長野県史主任編纂委員
"	山崎晃	上小教育会長
"	遠藤憲三	上田市文化財調査委員長
"	黒坂勝	塩田城跡保存会長
"	小出栄重	東前山自治会長
"	志摩修吾	上田市教育委員長
事務局長	滝沢石	上田市教育長
事務局次長	萩原袈裟男	上田市教育委員会社会教育課長
"主任	田中佐敏	"文化係長
"主事	林和男	"文化係主事

塩田城跡発掘調査団（昭和52年度）

団長	黒坂周平	県史刊行会主任編さん委員
副団長	五十嵐幹雄	上小考古学研究会長
調査員(主)	川上元	上田市立博物館学芸員
"	桐原健	長野西高教諭
"	岩佐今朝人	瀬津小教諭
"	山辺健夫	千葉経済高教諭
"	郷道哲章	下伊那農業高教諭
"	児玉卓文	飯山照丘高教諭
"	塩入秀敏	上田女子短期大学講師
"	桜井松夫	西塩田小教諭

〃	竜 野 敬一郎	丸子中央小教諭
幹 事 長	黒 坂 勝	塩田城跡保存会会長
幹 事	竹 内 七之助	同 副会長
〃	大 庭 正 十	同 役員
〃	鷲 原 重 光	同 〃

第三節 発掘調査日誌

7月19日(火) 晴

地元東前山公民館に於て、調査団の結団式を行い今後の調査の進め方等について話しあいをもつ。

7月20日(水) 晴

第3次発掘調査開始。午前中、グリッド設定、杭打ちなどを行い、午後2時ごろより各グリッドの表土はぎ作業を開始する。

7月21日(木) 晴

昨日の続きのグリッド表土はぎ作業を午前中でほぼ完了し、午後よりD-25～29、E-25～29、F-25グリッドに入る。E-30～32にかけて東西の暗渠列を確認。

7月22日(金) 晴

F列25～35グリッドの表土はぎ作業を行う。午後よりベルコンも使用する。D-25、E-25の第2層も掘りさげを開始し、土師質土器および青磁皿、天目茶碗片を確認する。

7月23日(土) 晴

文化庁伊藤延男監査官の現地視察あり。G-25～37グリッドの表土はぎ作業を行い、午後はI-32～37にも入る。さらにD-25・26、E-25・26及びD-30～32グリッドの第2層を追求する。

7月24日(日) 晴

I-31～37、J-31～37およびL-32～37、K-37グリッドの表土はぎ作業。またD-25～31、E-25～31、F-25～29、G-25～29部分の第2層の確認を行う。I-37、J-35、K-37グリッド部分より礎石らしきものを検出するがまだ建物跡と断定するには至らなかった。E-27の第2層より硯の破片も検出された。



第5図 文化庁伊藤監査官の視察

7月25日(月) 晴、曇

本日は大勢のメンバーで作業を続行する。K-30~36、M-30~36、L-32グリッドの表土はぎおよび昨日までの続きの第2層はぎを行う。

K-30~32グリッド部分に東西方向に大石の石列を確認する。夕方、雨降りとなったので4時30分に作業を中止する。

7月26日(火) 晴

I~M列31・32グリッドを中心として精査をするが、I列に石列のあることを確認する。また、D~G列25~29グリッドを-30cmまでさげ精査をするが、とくに遺構の検出はできなかった。

7月27日(水) 晴

E・F列26、30~32を下層までほりさげ、下の面を検出する。またD-33~35の精査をするが遺構はつかめなかった。

K~Mの33~37グリッドの第2層下部を追求し、K-33・34に礫群および遺物が確認されたが、その性格は不明であった。

7月28日(木) 晴、曇

I・J-29、I-30の表土はぎ作業。午後、F-27に礎石らしき石2個の検出があったが、その続きは確認できなかった。

L-36より古銭等が確認される。

7月29日(金) 晴

A・C・D・F区のほりさげ作業を続行するが、とくに目新しい遺構は確認できなかった。

7月30日(土) 晴

A・C区を中心とした整地作業を続行する。また、H列北側と30・33列西側のベルトはぎ作業を行う。

7月31日(日) 晴

E-25、F-25にまたがって、南北に走る石列(SD02)を発見する。さらに、F-25の西側にもう一本の南北にのびる石列が確認された。

また、写真撮影および図面とりも並行して実施する。

8月1日(月) 晴

ベルトはぎとあわせて、H～K列28グリッドの精査。L-28に石組み遺構を確認する。

8月2日(火) 晴

H列東西ベルトの北壁セクション図作成後取りはずし作業。また、SD01～03の暗渠取りはずし。さらにIM列26・27グリッドの表土はぎ作業を行う。



第6図 顧問をまじえてのミーティング

8月3日(水) 晴

H列の北側を全体に掘りさげ、SX01を追求する。I-27～30にわたって石列を確認する。

8月4日(木) 晴

G・H列の下部追求作業およびD～G列25も同様に石列を露出し精査する。K-31～33の遺構内(SX01)精査も実施する。さらに午後よりI～K列25～27グリッド内を精査し、石列の続きを確認する。H・I-26グリッドより青磁片などが出土する。

8月5日(金) 晴

調査員のみの調査とし、作業員は休日とする。

8月6日(土) 晴

比較的涼しい1日であった。本日はJ～L-25及びL-26、M-27グリッドの削平作業。またN-30グリッド南側のトレンチ清掃。

GF-27～29の削平。午後33列の南側に巾1m×9mのトレンチを設定して、地層の確認をする。

8月7日(日) 晴

調査区全面の清掃を中心とした作業をする。またF-38、E-37グリッドを新しく調査を開始する。清掃後全体の写真撮影をする。

8月8日(月) 雨、曇

朝から雨降りだったので、午前中作業を中止して様子を見るが、午後より雨が止んだため作業を開始する。以下の部分の調査をする。①SD02（暗渠）の北側I～K-25の石列をほりだす。②SD04（暗渠）H～L-26の石列ほりだし、③SD05（暗渠）I・J-25の石列をほりだす。

8月9日（火） 晴

調査区全面の清掃作業および周辺の清掃。午後、SX02、SX03の西側半分を切って精査する。I-24に石列の続きを確認する。

8月10日（水） 曇、晴

I～K列30、K列33の南北に幅1mのトレンチを設定して層位を確認する。午後、D-33、34部分（SX02）周辺の清掃をし、石列をきれいに出土作業を行う。

午後、文化庁石丸氏ほかの現地視察あり、今後の打合わせを現場でする。

8月11日（木） 曇、雨

I-24部分のトレンチ内清掃、および測量用杭打ち作業を開始する。

8月12日（金） 晴

本日で発掘作業は終了とし、後の測量のための準備をする。

8月15日（火）～9月2日（金）

測量作業。



第7図 最終日の記念撮影

第三章 遺 構

堀田城跡第Ⅲ次調査は「第Ⅳ-E段郭」の東半部を対象とする。南北34m、東西43mの長方形平坦面で、所有者は小松正寿氏、かつては桑畑であったが、昭和20年代に落葉松と杉が植樹され、作業開始前には径40cmほどまでに成長していた。

なお、昭和51年度に調査した西半部をあわせてのⅣ-E段郭の規模は、東西66、南北34mで、南北幅は西端27、東端34mと東するに従って広がっている。

郭の北方は、下段のⅢ-E-7郭と2.55、南方はⅤ-E-1郭と2.65mの較差、そして、東方は直ぐに深い神戸川の断崖で、同川との比較差は16m。現在、Ⅲ-E-8郭の東端から斜めの小径があって、川床に降り立つことができる。

南方、Ⅴ-E-1郭との段差部について、第Ⅱ次調査時の西半部の観察では65度の急傾斜で、地山上に山石を貼り付けただけの状態であったのに対し、今回設定した30列、33列トレンチでは異なった状態をとっている。現状は石塊が積まれたただけだが、30列トレンチでは斜面中辺に1.2mの大走り状平坦面があり、斜面には山石が重なり合って挿入、含入されていた。33列トレンチにも大走り状平坦面があり、以下、30度の傾斜で本郭の平坦面と接している。ただ、このトレンチでは地山に含入する石塊を見なかった。

即ち、大走りは東端から高く始まり、西するに従い漸次低くなり、第Ⅱ次調査時設定トレンチでは確認ができなくなってしまっている。そして、第Ⅱ次調査時の所見と同様、本郭平坦面との接点に凹みはなく、現在同処を西から東に走っている溝は、本郭造成時にあっては存在しなかったこととなる。

北方、Ⅲ-E-7郭との境は、これも一面の石積みで、段が構成されている。40度近い傾斜で、上端は垂直に近く積み上げられているが、これは後世の作業であろう。おそらくは、西方Ⅳ-W郭とⅢ-W-2郭間に見られたと同様に、段差は低く、傾斜は緩やかであったと思われる。

東方、神戸川に臨む崖面について、その崖面に接して幅2.5mの袖道が南から北へ向っている。特別な施設はないが、平坦面南東隅の10m間は、内側に石塊を並べ路肩を造っている。石塊下には基盤まで若干の間層があるので、この道は当初からの造成とは思えない。

又、崖面には後述するSD03の暗渠端と、平坦面南端の溝が口をあげ、同処下の崖面は挟られて小さな沢をつくっているだけで、特別な構造物は見られない。

最後に、Ⅳ-E段郭平坦面は、南北方向では南から北へ傾斜するも、東西方向では西半部は西から東、東半部では東から西へと傾斜方向が異なっている。このために、第Ⅱ次調査時の東辺あたりはやや滞水して、芹が沢山に生えていた。

このことは、発掘の経過において、第Ⅱ次調査時検出溝の延長上にある暗渠SD01と、6m

北に平行するSD03は、2本とも上面レベルは西端よりも東端が10cm高く、地表面での観察同様に、中央部に集水し、これを北に落すかと思わせたが、暗渠下底部では東端が低く、特にSD03では30cmも低いこと、崖面に暗渠の排水孔が見出されたことから、結局、本郭の平坦面は、造成時には南から北へ、西から東に傾斜していることがわかった。

暗渠遺構

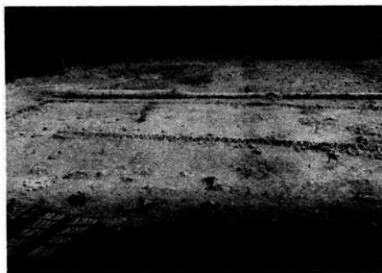
東西方向に走っているSD01、SD03のうち、前者はⅡ次調査時検出溝の延長上にあることと、上面レベルが溝の護岸列石上面と等しいことから、当初、溝の延長施設かと思わせたが、走向角度が僅かに外れることと、表土下第2層の黒褐色粘質砂土層から掘り込まれていることから、SD03ともども、時期の下降する盲暗渠であることがわかった。幅は60、深さは30cmを計る。

南北方向の暗渠では、SD01の東端からSD03へ水を落とすSD06の他は西端部に集まっている。SD02は南端から走り、SD04はSD02から別れ、SD05は南北幅の中間から始まっている。

これらの暗渠、特に東西方向をとるSD01、03だが、何故にかかる暗渠が必要とされたのであろうか。かつては桑畑であったが、桑畑は暗渠を必要としない。南半部に暗渠を必要とする何らかの施設が想像されるが、古老の記憶からは、それを覗くことはできなかった。SD03の東端、崖面に臨んだ袖道下は暗渠の水落しの場であり、特に大きな石塊が積まれている。この中には石臼破片や五輪塔の一部（地輪）が混り、又、面をとった大石も幾つか見られ、この中には案外、暗渠造成の前後に係る施設のものが混じっているのかも知れない。

平坦面の造成

30列での観察によると、南端から15mほどまでは基盤である黄色粘質砂土層を動平して整地し、同上には黄褐色粘質砂土層・黒褐色粘質砂土層、表土の順で堆積が見られている。各層の



第8図 暗渠遺構

厚さは12~13cmとほぼ等しい。

なお、第Ⅱ次の南半部調査では、礎石面上にもう一つの生活面が窺われたが、今回は見当らず、僅か36cmで基盤に達した。

北半部では、基盤層である黄色粘質砂土層は急に傾斜を増し、従って、その分だけ黒褐色粘質砂土層、黄褐色粘質砂土層が厚くなる。

I-30グリッド地点では、表土の厚さ10、黒褐色土層19、黄褐色土層15cmで、しかも両層中には黄色粘質砂土層のブロックが混入している。本郭造成に当って、南半部を削り、それを北半部に盛土した結果で、従って、整地面は北半部では黄色粘質砂土層上面、北半分は盛土された黒褐色砂土層で、このことはSD04の暗渠セクションでも窺われ、基盤層上に堆積している土層は、南端から4mまでは黒褐色粘質砂土層、次1m間は黄褐色粘質砂土層、そして、それ以北はまた黒褐色粘質砂土層で、その中には黄色粘質砂土のブロックが混入していた。

ただし、北半部全てが盛土で造成されていると云う訳ではない。東端から計って25m付近から西が顕著で、従って郭平坦面造成以前にあっては、同辺から南に向っての湧入があったのであろう。

さて、現地表面は南端と北端の差は90cmと相当な傾斜を見せているが、整地面においても同様で、差異は72cm。このうちにあつて、緩やかな傾斜が見られるのは東半部で、基盤である黄色粘質砂土層は礫を含み、その後角が同層上に露出し、一見、集礫群を思わせる。同群は平坦面北東隅に顕著で、そこから斜めに幅4mの帯状で流れてくる。礫塊は北東隅に近く大きく、西方に至るにつれ小塊となっている。

又、南半部の東方にも礫がある。さして大形な礫ではなく、黄褐色粘質砂土層中にある。但し、南東隅一SD01の東の一群には大形礫が見られている。

なお、この他に、南半部の西部、基盤層上で平石が10数ヶ発見されている。これらはみな河原石で、浦野川から持ち運ばれてきたものであるという。また、SD02の東5~8m、SD01の北2~3mに2ヶの四角い平石がある。一つは40×30、一つは50×35cmで、7~15cm高く基盤層上に露われている。

石列遺構

遺構としては、第一に護岸列石を持つ溝址があげられる。第Ⅱ次調査時に検出された建築跡に伴うもので、うち、礎石群の南を割っている溝は礎石9番を東に僅か離れたところで南へ1.2mずれ、更に東に向っているが、この末端が今回の発掘範囲内で把握された。この溝は、末端部分では北側にしか護岸の石を置いておらず、それも南北に走る2本の暗渠で切られてしまっているが、SD02のすぐ東に接しては一石があり、同石から北に向って三つの角石が並んでいる。そして、その北1.2m間が凹んで溝となり、更にその東側に四ヶの石が面を西に揃えて置かれている。即ち、建築址南側の護岸列石を持つ溝は、南にずれたところから6.5m東して北に直角に折れ、その末端はSD02に毀されて終ってしまったことになる。溝の深さは16cm

ほど、これは南側での深さとさして変らない。

遺構の第二としては、北半部に設けられている東西方向のSX01、同02がある。これは、西南端から北へ16m、SD02の暗渠にかかるところから東へ走る1条の石列で、東に15m延びたところで、北へ鉈形に屈折し、一区を劃している。この間には70cmの空隙があるところから、便宜的に鉈形部をSX01、直線をなす石列をSX02と区分した。

鉈形をなすSX01は、北へ張り出した西辺4m、東に向う北辺11m、更に南へ屈折する東辺3mの規模で、詳述すると、東辺は南端に一辺30cm大の大理石、北端隅部に一辺40cmの角石が据っているだけで石列の体は為していないが、背後に裏詰め石塊が幅30~40cmに亘って積まれているため、約2m間の石は抜き取られてしまったと判断できる。2ケの大理石、及び裏詰め石塊は盛り土の層に据えられていたため、掘り方については確認できなかった。

これに接する張り出し部北辺は長さ11mで、ここでは角石の面を北に揃えて据えられ、この間に抜かれた石塊はない。方向はE-110-Nで、東辺及び西辺と為す角は直角に近い。多くは1段だが、2段積み箇所もある。角石の上面は必ずしも水平ではなく、稜を上にとっているところもあるが、2段に重ねたところなど、上段の石は上面を水平にとる様に工夫されている。

この辺も、盛土の部分ゆえ掘り方はわからない。下段の石は整地面下に据えられてはいるが、基盤の黄色粘質砂土層までには15cmの間隔がある。石列背後には幅30~40cmをとって礫が裏詰めされている。

角石で構成されている石列のうち、北辺西端の上段のみは扁平な河原石で、ここから南へ屈折する4m間には、ほぼ等しい四角な石塊が並び、南端に大理石が据えられている。角石背後には他辺同様、裏詰め石が見られるが、そのレベルは石列よりも20cm高く、同角石上にもう1



第9図 SX01断面

段存したことが思われた。

この三辺からなる石列SX01で囲まれた平坦面のうち、石列上面と同レベルの範囲は南北8、東西11mで、大部分が盛土部分である。石列上面のレベルを読むと、東辺の南・北端が同レベルで最も高く、北辺は東から西に漸次低く、更に西端平石の上面、及び西辺南端石塊との差は26cmで、石列西辺部と北辺の西半分を3段積みにしてほぼ同レベルとなる。

この鍵の手に屈折した区画から70cmの空隔を置いて西に延びる石列がSX02で、長さ15m。方向は鍵の手部分北辺のラインと同方向のE-90-Nをとる。石列は2段積みで、下段が整地面下にあるのは同様だが、同ラインがSX01の北辺よりも4m南に位置しているところから、下段は基盤層に密着して据えられている。同列上面のレベルは東端、西端で変りはない。裏詰めの積層幅は大体30cmで他処と変らないが、中辺にあって1ヶ処、やや高まりをもって130cmまでひろがっているの、或いはもう1段、積み上げを考慮しなければならぬかもしれない。

西端の石は一辺45cmの大石で、北と西に面がある。このため、南に石列の屈折することが思われたが、暗渠SD02により確証は認められない。

現在の石列上面レベルを規準として平坦面の範囲を探ると、南北幅は3m強、現石列に更に1段、15cmを加えると南北幅は6m強となる。鍵の手部分のそれと同じく、総て盛土の部分である。

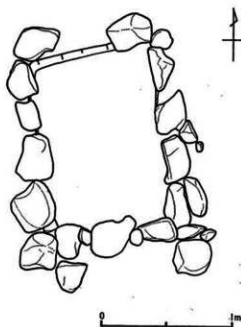
なお、より南の基盤層上に2ヶの礎石に似つかわしい角石が存するが、そのレベルに等しくさせるためには現石列上に35~45cmを加えねばならない。

SX05は、SX02の西方1.5mの間隔を置いて西方に走る石列を、今回は3m間を露呈するにとどめた。SX02西端は2面をとった大石で、その西にはSD02、同05の暗渠が走り、その暗渠の西端からSX05は始まっているので、一見SX02の延長を思わせしたが、E-30-Nと走向角度が異なっているので明らかに別な石列である。石塊は比較的大きな角石で、四面をとったものもあり、場処によっては3段に積みあげられたところもある。石列の高さは約35~40cm。石列の上面レベルはSX01西端大石より12cm高く、



第10図 SX05

第Ⅱ次調査検出建築址の礎石面、及び南側溝護岸列石上面レベルより45cm低い位置にあり、従って石列上には35~40cmの土が被さっている。



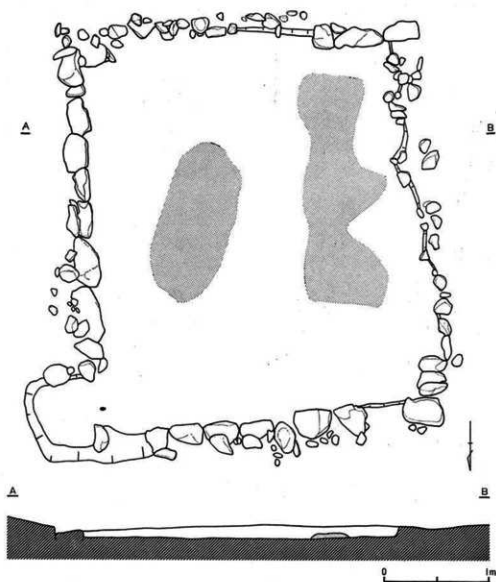
第11図 SX03実測図

SX03は、盛土上に営なまれた方形の石囲み遺構で、南辺と東辺に接してはSX01の石列遺構が屈折して走っている。南北に長軸をとるもので、内側で140、東西幅90cmで、大形方形の石塊14ヶが内側に面を揃えて1列、盛土を僅かに掘って据えられている。石塊に火熱痕は認められない。真中に1ヶ山石が置かれている。石囲み内側の層序について、上方、約10cmほど黄色粘質土が貼られ、以下、北に斜走している基盤層まで、黒褐色土の盛土である。黄色粘質土中には僅かながら炭粉があり、同層直下にやや大形の木炭片が見られた。遺物としては内耳土器の細片数点がある。

SX06はSX03の北方4.8mにある垣壊した石囲み遺構で、北東隅の石組が残っている。北辺東端は一辺50cmの大石で面は南を向き、それに接する東辺北端には面を西にとる2石が並ぶ。この石囲みの規模については不明だが、西に離れて石塊の散在をみるので、その一辺は或いは2.5m程度であったかもしれない。

SX04は南半部東方に発見された。南の斜面と交わるところから3.8mで、東西4mに互って石列がある。12ヶの山石が面を北に揃え、大部分は1段で、上面レベルはほぼ等しいが、部分によっては平石を重ねて2段としている。黄色粘質砂土層の基盤を切って据えられ、40cmの幅で裏詰めの際群がある。揃っている石列面の高さは20~25cm。掘り方については把めていない。同石列西端には隅部を思わせる石の配置があり、或いは同処から2mほど北に延びる列があるのかもしれない。又、東端においても2ヶの石が北に並んで置かれており、当初にあっては長方形の石囲みを呈していたかとも思われるふしがある。

SX07は、暗渠SD01の東に接した山石による方形石囲み遺構で、西縁はSX01東縁石列の延長線上に添っている。東西3.3、南北3.0mの規模で、縁石上面を基盤である黄色粘質砂土層上面と等しくする様に掘りこみ据えている。従って、縁石で囲まれた内部の深さは、内側に面を揃えて並べられている石塊の高さ——10~15cmで黒褐色土層が充填している。東縁の石列は北端が1、2石抜却されている程度で比較的良好な保存状態が良い。四角い割石がさして間隙を置かず1段に並べられているが、1ヶ処だけ2段に重ねられ、この場合の上石には扁平な石が用いられている。背後に裏詰め石塊があり、それを囲んで掘り方の輪廓があらわれている。



第12図 SX07実測図

が、その幅はさして広くない。東縁に次いで石列の保存状態の良いのは北縁で、1段に角石、背後に裏詰めめの石塊が置かれている。西縁・南縁の石列は大半が抜却されてしまい、裏詰めめの石塊が前面に崩れ出している。西縁の一部にあって、裏詰めめの石塊上端レベルが前面の縁石上面レベルを僅か凌駕しているところがあるので、或いは同処にあっては2段構成がされていたのかもしれない。

これら四圍の縁石について云えることは、掘り方があり、裏詰めめの石塊は存しても、その配列にさして丁寧な手法は講ぜられているとは思えないこと、及び、これら石塊には火熱を被った痕跡が認められないことで、SX03、同04、同06と共通している。



第13図 遠構実測図



構実測図

これら縁石で圍繞された方形部について、周囲より10~15cm掘り下げられた底面は基盤層である黄色粘土砂土層だが、その面には敲打するなどの特別な工作は施されていない。また中央部に厚いところで3cm程度に木炭が散布しているが、底面上には火熱を受けた痕跡は認められていない。ただ、基盤の黄色粘質砂土層は礫を含み、礫の一端は同層上に露出しているが、この範囲内には見られない。従って、含礫を除去し、軽く鍋底状にならす程度の工作は施されていると思われる。内部からの出土遺物としては内耳土器片多量・土師質土器皿破片・輪羽口破片・埴輪細片・鉄滓及び他鉱石の滓が散布している。

柱穴群について、SX02石列北1.7m辺に4ヶのビットが石列上面より10cm下った盛土の黒褐色土層面に穿たれている。

最も西端にあるP1は径33、深さ50cmで、断面U字形、上部5cm間には焼土が填まっている。出土遺物として染付細片1点。P2は径35、深さ15cm、断面は直。P3は径40、深さ20cm、断面は直。P4は径35、深さ32cm、断面は同じく直。P1・2・4は一見通っている様だが、1・2間は1・9、2・4間は2.6mと間隔が異なり、更にP4は南にずれている。

SX02北の盛土面についてはよく精査したが、この他にビットは見出せず、ビットを柱穴に擬しての上屋構造を想定することはできなかった。



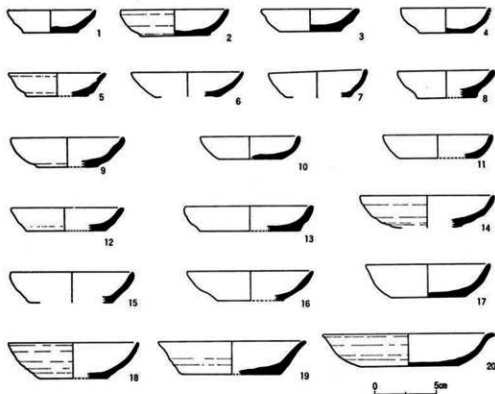
第14図 柱穴群

第四章 出土遺物

第3次発掘調査によって検出された遺物は、土師質土器・須恵質土器・陶器・磁器・金属製品、石製品、土製品、その他に大別できる。このうち、土師質土器が数量的に圧倒的に多いという、第1次・第2次調査例とほぼ同様な結果が得られた。以下、各遺物の個々について簡単にふれてみたい。

1 土師質土器

今次の調査によって得られた土師質土器の破片総数は、小破片をも含めて3707片であった。そのうち、いわゆる「かわらけ」に分類されるもの2703片、煮沸形態としての内耳鍋（内耳土器）片1004片であった。さらに「かわらけ」を前回までの区分方法に従って、おおむね口径10cm前後を基準とし、その大小によって皿および坏に分類すると、皿形土器片2614片、坏形土



第15図 土師質土器（坏・皿）

器片89という数値を示す。これらのうち、二次的に焼成を受けたか、あるいは窯の温度差によるものか不明であるが、器面の色調が灰色で須恵質化した土器片が45片あった。また、口縁部外面あるいは内外面に油煙の付着した、灯明皿としての用途をもつもの67片が確認された。しかし、これらのうち器形の推定できる資料は41点あったにすぎない。

皿（第15図）発掘区の全域から検出されており、皿はその大きさ、形状等から2つのタイプがある。（1～9）は小形皿とよばれるもので、底部から胴部に続く部分にくびれをもつものが主体で、器壁は概して厚手のものが多い。（8）は内面に油煙が付着した資料である。E-27出土。

これに対して（10～13）は口径に比して器高が低いもので、大形皿に属するものが多い。比較的薄手の器壁をもち、内湾するカーブをえがきながら外反する形状をとるタイプが多いようである。

これらの皿形土器は、いずれも器面全体をナデ成形により、底部糸切り手法が大半であり、胎土も精製されたものである。

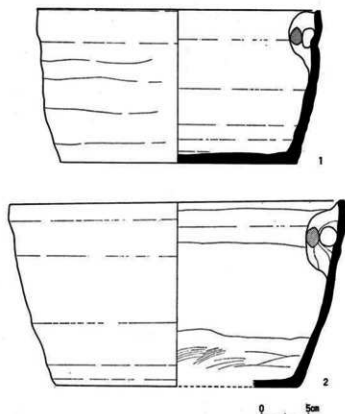
杯（第15図）（14～20）はこの分類に入れたものであるが、皿に比べて器高がやや高いものを一括した。皿同様器面全体をナデ成形により、底部は糸切り手法であり、胎土もとくにちがいはみられない。

④は内面に炭化物の付着が認められるし、⑨は口縁部内外面に油煙の付着がある。また②のようにとくに大形で、口縁部端が極度に外反するタイプもみられ、バラエティにとんだ器形がみられる。②はJ-34グリッド出土。

内耳鍋（第16図）皿・杯類に比して破片点数も少なく、全体の器形が推定できるものも2点ほどである。成形は器壁の内外面あるいは内側底部をナデにより、耳部をヘラケズリした後ナデによる調整が一般的である。また、これらは器壁外面に煤が付着して黒褐色を呈しているが内面は茶褐色を呈している。今次の調査では、内外面煤が付着して黒褐色をしている資料もわずかにみられた。

(1)は口径30.0cm、底部径25.0cm、高さ16.2cmを計るもので、第2次調査の際Aタイプに分類したものである。これは器壁がやや内湾するカーブをえがきながら立上り、胴部上半で一旦くびれ、さらに内湾気味のカーブをえがきつつ口縁部に至るもので、大きさの割に器壁が厚手に仕上げられている。L-36グリッド出土。

(2)は口径35.5cm、底部径25.7cm、高さ19.5cmと大形のものである。器壁はほぼ直線的に外反しながら立上り、胴部上半でわずかにくびれるが、さほど強くはなくそのまま直線的に口縁部に至る形状をもつもので、Bタイプに入れるものである。D-28グリッド出土。



第16図 土師質土器（内耳鍋）

2 須恵質土器

第1次調査の際に確認された珠洲焼の系統をひく須恵質土器である。いずれも、外面に叩き目痕を有し、焼成良好な資料で甕の破片と思われるが、小片のためその形状は不明である。わずかに数点がみられるのみである。

このほか、時代がややのぼると思われる須恵器の甕胴部片、蓋片等も若干検出されていることをつけ加えておきたい。

3 陶器

常滑系・瀬戸系・美濃系陶器、その他の陶器に大別できるが、いずれも小破片のため器形の推定できる資料は得られなかった。

常滑系陶器 約30片の破片がみられるがいずれも大形甕の胴部あるいは口辺部片である。色

調は茶褐色を呈した器壁のふ厚いもので第1次、第2次調査の際に得られたものと同様な資料である。

瀬戸系陶器 黒褐釉の施された天目茶碗の破片18点とやや大形器形を呈するものと思われるグリーン色の釉を施したもの、また茶黒色系の釉のかかったものと2系統のものの破片13点がみられるにすぎない。いずれにしても小片のため器形を推定するまでは至らなかった。

美濃系陶器 瀬戸の破片約18点が検出されたのみである。その大半は小形壺の破片と思われるが、ほかに皿形の口縁部・高台部片がみられる。

その他の陶器 上記資料のほかに、灰釉陶器類および須恵器に近似する硬質の陶器も若干確認されているが、小破片のため器形を復元することはできない資料であった。

4 磁 器

第1次・第2次発掘調査と同様、その大半は青磁・白磁・青花(染付磁器)の舶載磁器類で、わずかに国内産の磁器が共伴している。しかし、いずれも小破片であり、器形を復元できるものはみられなかった。

青磁 破片41点が確認できたが、うちわずかに接合できる資料もあった。形状を復元できるものはなかったが、これらの破片の中では碗器形及び皿器形を呈するものが多く、ほかに香炉の足部と思われる小破片もみられた。また、内面に欄目文を施したいわゆる珠光青磁と呼ばれる、時代のやや下と思われる資料も検出された。

白磁 この破片はすべてで21片にすぎなかったが、大半は前回までの調査で確認された高台付の皿器形を呈するものであったが、1点のみ、時代が中世初期までのぼると思われる影青風の小型壺の口辺部小破片も含まれている。

青花 13片の小破片のみであるが、いずれも皿形のもので、わずかに碗の破片が確認されるのみである。文様は発色のよくない呉須で、外面あるいは内面に草花文を主体とした図柄が多いようであるが、小破片のため不明である。

5 金属製品

銅銭、小柄、刀の鐔拵、鉛玉、鉄釘、その他の資料が出土したが、いずれも少数であり遺物によっては腐蝕がはげしく原形をとどめるものはほんのわずかであった。

銅銭 今回の調査では21枚検出されたが、1点を除いて他は中国銭であった。検出された銭文を表にすると次のようになる。

従来の調査とくらべて、年代的にほぼ同様な結果がみられた。今回は1点のみの検出例であるが中国銭にまじって寛永通宝が確認された。また、景祐元宝、聖宋元宝などの新しい銭文が

種 類	出土グリッド	出土枚数	鑄 造 年 代
淳化元宝	Z	1	北宋淳化元年(990)
景祐元宝	L-36	1	北宋景祐元年(1034)
皇宋通宝	I-26	1	北宋皇宋2年(1039)
熙寧元宝	J-27	1	北宋熙寧元年(1068)
元豐通宝	I-24, K-26	2	北宋元豐元年(1078)
聖宋元宝	I-25	1	北宋建中靖国元年(1101)
大觀通宝	30列南トレンチ	1	北宋大觀元年(1107)
洪武通宝	G-27, G-28 SX04, F-29	4	明洪武元年(1368)
永樂通宝	L-36, H-26 F-24	3	明永樂6年(1408)
寛永通宝	J-34	1	日本寛永年間(1624~1644)
(不明銭文)	F-25, F-36 H-32, J-25 SX04	5	
		計21	

その組成に加わった。

小柄 1点のみの出土である。銅製のもので、刃部を欠いた柄の部分であるが、ここに扇の文様を浮彫したものである。I-31出土。

銅鉄 2点確認されているが、いずれも銅製である。K-34および表探資料である。

鉛玉 火鑄銭の玉といわれるもので、径10mmの偏平球である。これ1点のみであった。E-34出土。

鉄釘 金属製品のなかではこの鉄釘が比較的多く検出されたが、いずれも腐蝕がはげしく原形をとどめるものは数点しかなかった。いずれも角釘である。

6 石 製 品

石製品に含めるものとしては、硯・砥石・五輪塔・石臼などであるが、いずれもわずかであり、完全のものはみられなかった。

硯 今次の調査では7点の硯片が検出できたがいずれも小破片のため全体の器形を推定できるものはなかった。石材は暗灰色のものが主体であったが、各1点ずつ暗褐色・灰色のものも見受けられた。

砥石 3点の資料が確認されたのみである。いずれも材質は玢岩系のものと思われるものがあるが、半分欠損した資料である。

五輪塔 H-26から五輪塔火輪部、またG-38からは地輪部各1点が検出された。その出土状態からみて、後にここに動かされたものとみてよいかと思う資料である。いずれも安山岩製である。

石臼 G-37から1点の石臼片が発見されたのみである。

7 土 製 品

第3次調査によって、あらたにふいごの羽口およびそれに伴う鉄滓が検出された。

ふいごの羽口 破片も含めて14点の出土がみられたが、いずれもSX04、SX07を中心に集中して検出された。欠損して完全なものはないが、うち2点は胴部の直径が8.5～9.0cmを計り、中心の孔の直径がそれぞれ2.3cm、3.0cmあるもので、先端部に鉄滓の付着したものもある。

鉄滓 ふいごの羽口と同様にSX04およびSX07を中心としてかなりの量が採集された。

第五章 小 括

本年度の発掘は、前述のように50年・51年度発掘の継続であり、城跡の最も広大な面積をもつ段郭の一つであるところからその結果が目されたが、すでに桑畑として開発された跡であったためであろうか、遺構・出土品ともに完全な形を残しているものが少くその検証には大くの困難を伴っている。

しかし多量の出土品が、中世初期から末期までと幅広い年代にわたっていることが考証されるため、いわゆる中世の長年月にわたる「複合遺跡」であることは明らかであって、その本格的解明は今後の調査にまたねばならない。



遺跡全景(北より)



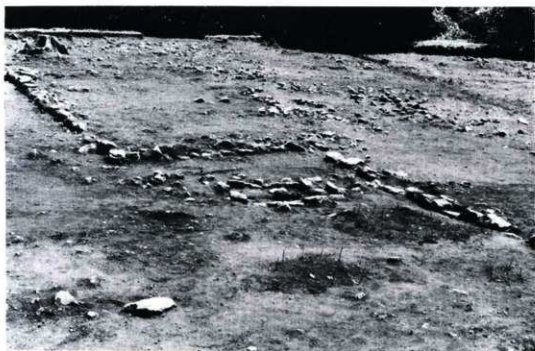
遺跡近景(東より)



暗渠遺構(西より)



遺構全景



石列遺構(東北から)



SX01石列遺構断面(南から)



石組遺構 SX03(東から)



石組遺構断面 SX03(東から)



石列遺構 SX04(北から)



石組遺構 SX07(北から)



内耳鍋



石造塔



皿・環類



内耳 鍋



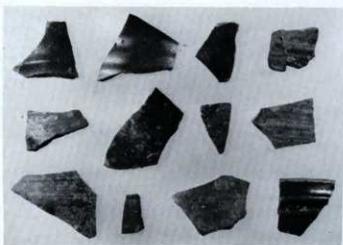
内耳鍋



須惠質土器

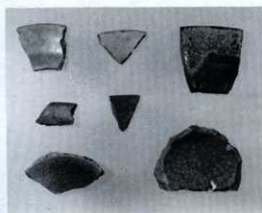
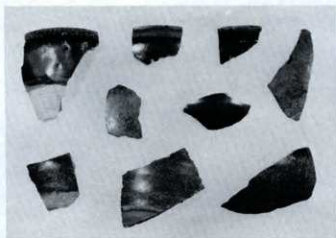


陶器



陶器

図版十一 陶器



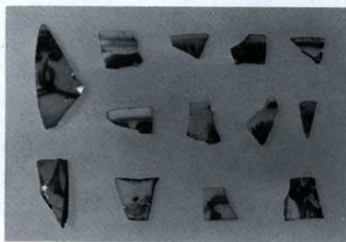




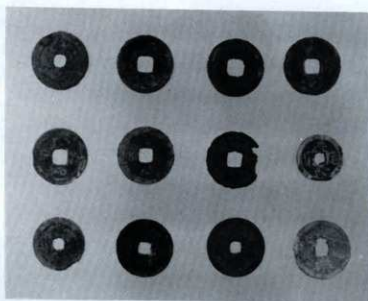
青 磁



白 磁



青 花



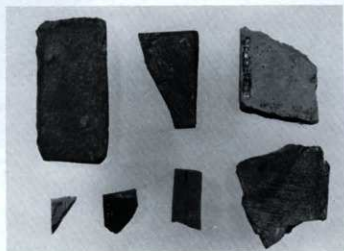
銅 銭



銅挾・小柄・鉛玉



鉄 釘



硯



砥石



ふいごの羽口



ふいごの羽口



鉄 滓

塩田城跡 第3次発掘調査概報

昭和53年3月31日

編集 上田市教育委員会
発行 上田市大手1-11-16

印刷所 信毎書籍印刷株式会社
長野市西和田470